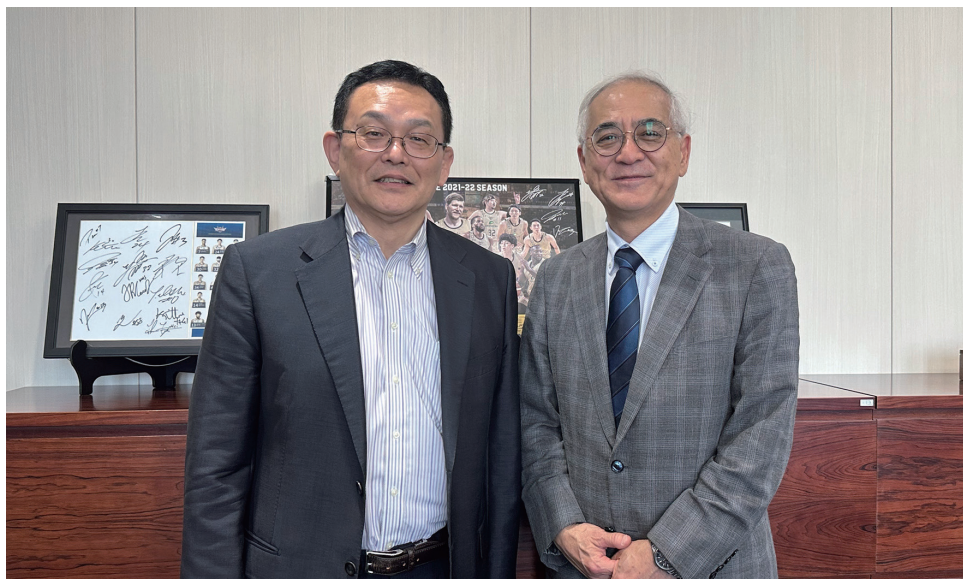


琉球大学病院 病院長 鈴木幹男 先生



久貝理事> 改めて、沖縄県医師会広報担当理事の久貝と申します。琉球大学の病院長に就任された、鈴木先生に沖縄医師会としてインタビューをさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。ご就任おめでとうございます。率直なお気持ちはいかがですか。

鈴木先生> ありがとうございます。
新しい病院で気持ちはすごくいいですね。足かけ10年間藤田先生と大屋先生の時にずっと副病院長として病院長を支える立場で職務に携わってきましたので、その役割について一定の理解はあるつもりでした。しかし、実際に病院長として職責を担ってみると、改めてその責任の大きさと奥深さを実感しています。

今回、新たな舞台となる機能性に優れた新病院で、職員の皆さんと共に新しい伝統を築いていきたいと考えています。

久貝理事> 副院長を10年間されて、今回院長になられたということですが、色々な取り組みを考えておられますね。いくつか、優先してやりたいことはありますか。

鈴木先生> そうですね。まず取り組みたいのは、救命救急や重症系病床、手術部門といった基幹機能のさらなる強化です。これを支える中央診療部門の体制も整備しています。県内各地からの難治疾患の受け入れを進めると同時に、入退院支援機能を充実させ、多くの患者さんに質の高い医療を届けたいと考えています。

やはり一番大事なのは、医療圏が南部医療圏から中部医療圏に変わったので、この中部医療圏の中で受け入れてもらうのも一つですね。

そのためには、病診連携や入退院支援の部門を強化して、患者さんが来やすい病院、それから紹介していただける病院にしたいと思っています。

さらに、沖縄健康医療拠点の中核になっているので高度医療を提供しなければいけないことです。

病院機能はかなり強化しているので、重症の患者さんを県内全域から受け入れるということと、それから素晴らしいヘリポートを整備したので、離島やへき地の方からでも来ていただけるような形で考えていますね。また、中部地域の救急医療体制は逼迫しており、少しでもその改善に貢献できればと思います。さらに、働き方改革を進め、職種や職階の壁を越えて互いを尊重し合える職場風土を育み、誰もが「働きがい」を感じられる病院づくりをめざします。

久貝理事> 医療圏が南部から中部に移ったということですが、大学病院は1つですので全県から患者を受け入れないといけないと思います。やはり患者層の流れは変わりましたか。

鈴木先生> 随分変わりましたね。南部から引き続き来られる方もいるのですが、それ以外にやはり中部の患者さんがかなり増えています。中部地域の方から紹介や患者さん自身も救急関係で、かなり来られていますね。

久貝理事> 大学病院ですから医療圏は全てということで考えているのですが、県内唯一の大学なので県民から寄せられる期待も大きいと思います。

鈴木先生> あとは、それに応えていけるような医療を提供する体制と、実際に設備、機能として病院自体はかなりいいものができているので、今度それを動かす人材をうまく配置すること、それがちゃんと動くようにシステム作りをするということですね。

旧病院は建物の老朽化が進み、その対応が課題となっていました。新病院は「沖縄健康医療拠点」の中核施設として、救命救急センター、HCU、ICU、GCU、NICU など重症系の部門を大幅に強化しました。手術室も14室へと拡充され、手術対応能力も高まりました。



また、生殖医療やがん化学療法など、社会的なニーズの高い分野も充実させています。病室はゆとりのある設計とし、個室数も増やすことで療養環境を改善しました。食事もニュークックチル方式を導入し、患者さんの快適さを重視しています。

加えて、大型の立体駐車場の整備により、通院時の利便性も向上しました。

医療の未来を拓くためには、研究の充実も欠かせません。隣接する先端医学研究センターでは、臨床研究の体制整備や再生医療への取り組みを進めています。

国際化も大きなテーマです。南に開かれた立地を活かし、ハワイ大学などの海外の大学や医療機関、企業との連携を深めています。また、多言語での患者支援を強化するため、AI技術を活用した体制整備も進めています。

久貝理事> 病床数もだいぶ増えましたか。

鈴木先生> 元々600床が620床になったんですよ。

今はまだ看護師の数が足りなくて制限して535床です。GW明けから593床になります。

久貝理事> 1月から移って、あれからもう4ヶ月過ぎようとしています、やはり医療従事者というか、特に看護師の確保が大変ですね。

鈴木先生> そうですね。4月から新しく入ってきてくれたことと、今まで育休などで休まれていた方も戻ってこられたりしたので、少し病床はオープンできるようになりました。

久貝理事> 大学病院として、当然他の病院、県立病院や民間病院と協力しないといけないと思うのですが、その辺の連携はいかがでしょうか。

鈴木先生> 病院や診療所にはそれぞれ異なる役割が求められていると感じています。大学病院には、高度医療の提供、新しい医療への挑戦、そして優れた医師の育成という重要な使命があります。ただし、これらを大学病院だけで実現することはできません。

県立病院をはじめ、県内の各医療機関や診療所の先生方と連携し、「患者さんが主役となる医療」を共につくっていくことが重要です。

人的交流も含めて連携を強化しつつ、県立病院とか民間の大小の病院の重症の患者さんを受け入れていくという形にしていかなければいけないと思います。

久貝理事> そうですね、重症患者の受け入れは大学病院がやらないといけないと思いますね。

もう一点は、やはり島嶼県ですので、琉球大学にできた建学の精神と医学部として、離島医療に関してはいかがですか。

鈴木先生> 離島医療についても、大変重要なテーマと捉えています。住民の皆さんとともに取り組む生活指導や検診、日常の診療に加え、必要な時に高度な医療を提供できる体制の構築が求められます。琉球大学病院としても、人材派遣やヘリ搬送などを通じて積極的に支援して参ります。

離島は今も派遣はしており、継続していくということと、それから巡回診療などで対応しているのです、そういったところも引き続きやっていかなければいけないですね。



久貝理事> 鈴木先生の専門は耳鼻咽喉科ですが、北部や宮古のような地域も派遣が難しいと思いますが、その辺はいかがですか。

鈴木先生> 耳鼻咽喉科に関しては北部地区と宮古地区は派遣していますね。あとは、八重山地区は神戸大学から来ていますが、八重山の周辺の離島については検診に行っています。色々な形でできると思いますね。

久貝理事> 私も院長時代かなり鈴木先生の地域の医療を守っていく姿勢は非常に共感していました。

ありがとうございます。

先ほど高度医療と言いましたが、例えば海外や南の方に開けているとよく言われますがその辺りはいかがでしょうか。

鈴木先生> 沖縄県自体は、アメリカ軍基地やOISTがあるので、外国人の患者さん、あるいは中国やイスラム圏のところからもやはり来られる方がいるので、そういったところはやはり引き続きやっていかなければいけないと思いますね。

なかなか医療のインバウンドは、トライ & エラーになると思うので、様子を見ながら行っていきたいです。

久貝理事> 東南アジアと連携したり、あるいはメディカルツーリズムも受け入れていく予定ですか。

ここは一応、そういう拠点になるという風に聞いていますが。

鈴木先生> 拠点となるかはわかりませんが、メディカルツーリズム自体は受け入れていけるような方向で考えています。沖縄県ではあまり他の病院でもされていないようなので、将来的には受け入れられるように、4月からシステム作りの検討を始めたばかりです。

久貝理事> 西原から移って新しくなりましたが、これまでの前院長が踏襲してきたことを引き継ぐのも非常に大事なことです。新院長になられて取り組みたいことはございますか。

鈴木先生> 今まで制限されていたことですね。例えば、救急でも色々な制限があったので、多くの患者さんを受け入れられませんでした。今はかなり改善されています。

また、麻酔科を充実させているので手術もかなりの件数ができます。

前病院と比べると年間 2,000 件ぐらいは増やせる見込みなので、手術が必要であるとか、あるいは急変とかですね、そういうのにもかなり対応ができるようになってきて、非常に頼もしいと思います。

久貝理事> これからどんどん、また手術に限らずがん治療も高度化してきますよね。その辺も十分受けられる体制がありますか。

鈴木先生> 外来化学療法室は今まで部屋が少なかったのですが、今は 30 名程度受け入れる準備ができています。今はまだフル稼働はしていませんが、化学療法室は余裕があり、4月から化学療法専門の先生を雇用したので、がんセンターを中心にがん治療にもさらに取り組みたいと考えております。

新規医療ではロボットですね。今、ロボット支援手術が外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、泌尿器科がやっていて、手術できる術式もかなり増

えています。今、もうロボット支援手術がほぼフル稼働に近い状態になってきているんですよ。

ロボット支援手術は低侵襲なので患者さんのためでもあるし、あと若手の医師が外科系の手技に興味を持つきっかけになります。医学生に見せながら手術をやっています。卒業しても興味を持って入職してくれる医師を増やせるように今考えています。

久貝理事> 医学生の話が出ていましたが、例えば臨床研修なども、今回かなりマッチングも良くなっているような気がしているのですが。

鈴木先生> マッチングもできる限りフルマッチに近いような状態を保っていきたいと思います。

久貝理事> そうなんですね。もう少しいくつか伺いたいんですけど、例えば働き方改革はどうでしょうか？上手くいっていますか。

鈴木先生> 琉大病院自体は以前から結構働き方改革は進んでいて、今連携 B になっている人は数名で、ほとんどは A になっています。

久貝理事> それはいいですね。

本当に一時期どうなるかっていうことで、働き方改革について新聞に掲載されていて話題になっていました。



鈴木先生> そうですね。一応、学位の研究は自己研鑽ですね。

しかし、この学会に発表しなさいとかの場合は、仕事になりますね。

久貝理事> 状況に応じて別けているわけですね。

鈴木先生> 基本的に研究での居残りは、ほぼ自己研鑽にはなります。

久貝理事> なるほどね。あと、県立病院も7～8割コロナ明けで赤字になっていますけれども、病院長として大学病院の経営についてはいかがお考えでしょうか。

鈴木先生> そうですね。それが1番頭が痛いところですけども、今後手術件数も増えてくると思うので頑張っていきたいですね。

久貝理事> 手術件数も増えていると言っていましたからね。

県医師会としても、大学病院と協力していかないといけないと思っていますが、何か県医師会にご要望とかありますか？

鈴木先生> いや、要望というか感謝しています。この間、田名会長が来られて、琉球大学医学部生へ白衣を贈呈いただきました。刺繍も入っていて、凄く素敵な白衣でした。

久貝理事> 実は、ある理事からの発案なんですよ。

学生さん達も、医師会に対して少しでも親近感が湧いて入会してくれたらありがたいなと思っています。

鈴木先生> 沖縄県には、優れた臨床研修体制が整備されており、全国から多くの若手医師が研修に訪れています。医師会と聞くと、開業医の先生方の集まりといったイメージを持たれ

ることもありますが、沖縄県医師会では、琉球大学医学部生への白衣授与式をはじめ、研修病院群での懇親会、県医師会医学会総会での表彰など、若手医師の育成に向けた数多くの魅力的な取り組みが行われています。

私たち大学病院も医育機関として、県内の病院や医師の先生方、そして医師会と連携し、初期研修を終えた若手医師が沖縄に定着し、長く活躍できるように力を尽くして参ります。

久貝理事> ありがとうございます。今後ともぜひ続けていきたいと思っています。

田名会長も、琉球大学出身ですし、非常に思入れが強いのもあるかもしれませんね。

あと、最後になりますけど、健康法や趣味、座右の銘がありましたらちょっと1つずつ教えていただければありがたいです。

鈴木先生> 私の健康法は「歩くこと」です。忙しい日々の中でなかなか運動の時間は取れませんが、できるだけエレベーターを使わず、階段を利用するよう心がけています。

久貝理事> ちなみにこの建物は11階でしたっけ？

鈴木先生> 居室は12階まであります。12階も出来ないですよ（笑）

医局は9階だから9階までを1日何回か往復したら、もう相当な運動になりますね。

久貝理事> そうですよ。登山みたいな感じの病院ですから。良いと思いますよ。

あとは、趣味は何でしょうか？

鈴木先生> 趣味はゴルフと映画鑑賞です。ゴルフ歴は長いのですが上達しません。しかし、屋外をゆっくり歩くこと自体が良いリフレッシュになっています。映画は、あまり深く考えず楽しめるアクション映画が好みます。

久貝理事＞　そうですね。ゴルフは大体、月1回ぐらい行かれるのですか？

鈴木先生＞　残念ながら、ここ1年ぐらいは2ヶ月に1回ぐらいでほとんど行けてないんです。

久貝理事＞　それじゃあ、是非時間を見つけてください。身体あつての物種ですからね。

あと、心掛けている言葉、座右の銘があれば教えて下さい。

鈴木先生＞　座右の銘は、「千里の道も足下から」ですね。

やっぱり、一步一步歩いていくのがいいかなと思いますね。どんなに遠い道のりも、一步一步の積み重ねが大切だと思っています。琉球大学病院の運営は、一足飛びに成果を出せるものではありませんからね。

日々の地道な努力こそが、確かな歩みになると信じています。

久貝理事＞　なるほどね。急に跳躍はできませんからね。

鈴木先生＞　バックキャストिंगというか、目標を定めて今この位置にあるかということを確認しながら一步一步上がっていくことですね。

久貝理事＞　堅実な先生ならではの非常にいい言葉だなと思います。

鈴木先生＞　ありがとうございます。

久貝理事＞　鈴木先生、本日は長い時間ありがとうございました。

インタビュアー：広報委員 久貝 忠男



PROFILE

学歴

1986年 滋賀医科大学医学部医学科 卒業
1987年 滋賀医科大学大学院医学研究科 入学
1989年 滋賀医科大学大学院医学研究科 単位取得後退学

職歴

1986年 滋賀医科大学医学部附属病院 医員
(研修医、耳鼻咽喉科)
1989年 滋賀医科大学医学部耳鼻咽喉科 助手
1995年 米国テネシー州立大学医学部
免疫アレルギー科 research fellow
1996年 滋賀医科大学医学部耳鼻咽喉科 助手
1999年 滋賀医科大学医学部耳鼻咽喉科 講師
2005年 福岡記念病院 耳鼻咽喉科部長
2006年 琉球大学医学部 教授
(高次機能医科学講座耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野)
2010年 琉球大学大学院医学研究科 教授
(耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座、改組)
2012-2013年 琉球大学病院長補佐(臨床研究担当)
2015-2025年 琉球大学病院 副院長
(診療、経営、医療安全担当)
2025年 琉球大学病院長・琉球大学理事・副学長

資格

耳鼻咽喉科専門医・指導医、日本気管食道科学会専門医、がん治療認定医・指導医、頭頸がん専門医・指導医、耳鼻咽喉科・頭頸部外科ロボット支援手術コンソール術者認定、日本アレルギー学会専門医・指導医、日本耳科学会耳科手術指導医制度暫定指導医、日本鼻科学会認定手術指導医制度暫定指導医、日本めまい平衡学会専門会員・めまい相談医、顔面神経麻痺相談医、嚥下相談医

所属学会

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会(代議員、地方部長)、日本気管食道科学会(副理事長)、日本頭頸部外科学会(副理事長)、日本頭頸部癌学会(代議員)、Asia-Pacific Society of Thyroid Surgery(理事)、など